

かせぎとれもへ近邊の人は喚を梁山泊と云ふくらいに悪むべき恐ろしき、所詮ざりまじ
 この頃住職眞學和尚のブラ〜病氣をわづらひまして床お臥せつて居ましたのが遅々快方よ
 趣き獨り何やら思案して居りました裏の戸わけて訪問て來者がありませ(銀)オイ眞學さん
 居やそか(眞)ア、居るんだが誰人だへ(銀)とりや有難へ私でと銀造でと(眞)マアよまの銀
 造さんまばらくま〜誰人も居やしねへから上つて緩然とる(眞)銀)ま〜びら伊免ねへ暫時
 まの土地おや旨へ仕事づねへから外へかせきま往んだがどうしたへたいらうお前さんの
 お顔の色が悪いとやねへかどうか爲のかねへ(眞)コリや見附らきて甚だ面目のねへ話だの
 實はお前も知てるだろ吉野の澤瀉屋も居る千代坊(銀)ナニお千代坊ウムとらした(眞)わ
 いつみとらした譯か自己は惚て仕舞て忘らきてそれ困じてゐの通りア〜病氣よ爲た
 のだのわいつと一袋も寐様な考へが出へかのう(銀)ウムとらかののお千代ぼうよついちや
 自己もまの通譯は覽ませへ眉間へ疵の出來てるだろ是や皆なお千代ぼうが爲よよう爲た
 が未だ忘らき事實の意出してさ〜ん〜思め〜しいからなくさんで女郎もても賣腹慰ませ
 る必組で居ひさ(眞)とらかそんならお前もやつぱりお千代の爲りかアモさつても男殺しと

この娘だかおシテラの眉間の疵の來歴のどうしてとらなつたか聞らじやねへか(銀)ウム
 おきもどうも男らしく無から自分で愛想を盡して居る體態だ實におういふわけさど前回よ
 やせし話しを一通り話して聞せました(眞)ウムとらとじや尙更情慾を遂てから腸慰せしなく
 ちやいけねへな(銀)オイ眞學様そんなら如斯いふ事よ爲て本望を遂ようじやねへか(眞)ウ
 ム如何いふとよして(銀)まう自己の朋輩を三人許り加擔るからお前骨折賃金拾圓呉ねへ
 か(眞)どうとるのか朋輩も呉てるのか(銀)無論とそつして四名てあつてと澤瀉屋へ忍
 んで猿轡を快て銜んで來〜そうさへ仕や入里離れた此お寺とさほどお千代坊の泣くもめ
 いても安心してお前と兩人で思ふ通と本望を遂るまどの出來るだらうじやねへか(眞)オ、
 、そりや宜都合だ本望さへ遂りヤ十圓位のはした金の何でもねへ確お呉て遣から首尾よ
 く銜んで來呉る依頼から(銀)オ、承知した安心して待て居さへと言葉を殘して出で〜往
 して見送して(眞)旨々と本望遂げたいものだ和尙の一日三秋の思ひをあして待つて居り
 ます

ぬるの十二月の四日の夜惡黨銀造の同じ朋輩の犬目の宇野吉と骸骨吉と小地獄金太と云る

何とも勝り劣りのない悪黨どもを加搦らひまして吉野驛の端所ある大橋屋と云へる怪しひ茶屋へ遣入つまらぬ煎しめ者で酒を飲んで居りましたがてうとあの晩の大雪ぶりで多ざりましたから四人が悪事を行ふの願強を晩で多ざりませ(銀)ヤイ宇野お前がみの前の晩澤瀉屋へ拵子よ往たそうぶかだつた案内をよく知つてるだろう(宇野)ウム前の晩は豆盜賊よ遣入てほんどうの拵子は爲なかつたぶそれじや今宵あそみへかせぎよ往く了簡か(銀)ウムお前もあか〜感心な男だ豆盜賊ツて誰か床へとろぼうよ往つた(宇野)ウムあのお前たちも知てるだろうッレ器量美のお崎さ(銀)ウムそう〜あの尻軽か(宇野)あいつぶお前先日から妾と一所は寐て呉色つと云ふからお膳を拵へらさるのを箸を取ねへのは男の恥だときよお崎の器量と来ちや瓜實顔でまんざらでもねへから前の晩往つて遣つたらたいりう嬉しぶつて泣きやぶつたよ(金)オイ〜宇野うぬいおのろけの止ねへな(銀)それじやお前はよくあその案内を知つてるなわ(銀)ウムと色じやわのお千代はうの寐て居る處も知つてるだろう(宇野)ウム大知だせ〜お崎の隣坐敷であそみのお神さんと寐て居らア(銀)そうかそれでお安心した實はなわア、お千代坊よいおれぶ惚きて居てあいつぶ爲よ如此爲たんだが今

曾はさん〜悪んでそれから金よして高飛する了簡て居るからとせでお前たちを加搦つて来たんだがみんな一ト骨折て呉んねへあそとあの観音寺の住職奴がお千代の爲よあんな悪黨でも惚わすらひをして居るからつけあんで往た所首尾よくお千代を鎊んで呉〜ば金圓を十圓やると言たから自己等の一かせぎしてかわる〜あの娘をなぐさんであまりを眞學和尚よ遣そとから娼妓よ賣つて罪の和尚よあそりつけて仕舞さよしか(骸)さそぶは銀造親分よ〜云つたりや宜いとも往つて遣つけて来よう(金太)そんなら手等の二人でお千代を引搦ひ二人でお女房さんを捕つてをいて逃る様なとよ爲様(宇野)ウムとせで宜らう(銀)ヤイお前たちのぬかつて失敗ちやいけねへよ(金太)なんなよ心配しなさんな十二時の梵鐘を台圖よ四人の曲漢兒の手拭間深よ雪の赤かを既足てやつて参りましたむかふから表面を通る別嬪の少女を先きよたて提燈照して此方へ参りませ〜その提燈よはふとく〜おもだかや〜と書てあてまして身装は上よけんちうの合羽を着て下服の三枚小袖を襦高よ上げ緋縮緬の下帯は時々看へまして鼠縮緬の頭巾を間深よ包んで居りましたが銀造のよ〜〜瞞して看ませと紛ふ方なきお千代でござるから幸福よしと思ひ合圖の聲をか

けまどや否や傍々の木影から四人のバラ／＼と出まして突然その婦人と懐き抱かれれば
 千代は直ち猿轡はませられ女中のアレーと逃ぐる間もあらばお大驚し捕まつた小鳥の
 如く一人の男も遠く投げ出さして仕舞ひ起さて見れば最早人影看へずありましたから驚い
 て澤庵屋へ斯くぞ知らせ澤庵屋での大い驚き早速人と戸長の家と警察署へ走らせて訴へ
 ましたから警察署での巡査警部を四方へ廻して手配り致しました

説話兩個分をまして四人の悪黨のお千代を撥いて往つて観音寺へ参りまどと眞學和尚待
 ち兼ねはや酒肴の準備の整のつて居りませ(眞)ヤアどうも辛苦勞でつたまゝ一杯やるの
 宜い(銀)オイ眞學さんたいろうな荒療治を遣たから拾圓の金よりもとつと餘計貰ひやせう
 (眞)怒の深へあよし／＼承知したまゆ一杯やるが宜い

お千代と思つた婦人の頭巾を取つてオヤまゐと言ひながら落附拂つて坐るのを看ませどお
 千代とは思ひのほか姿体も器量もつくら似て居りませど少一年迄の増て居る年増てどか
 らもどこの悪黨もあればと許り驚いて(銀)ヤアまりやお千代とやねへは(昔ノ者)ウムと
 出てふんち間違ひ起なるや(女)みなさんへいおんはんは有りいと云て坐中を看まわした

から再度屹然就中和尙眞學は呆氣にとられて居ました(銀)は誰でござませうか眼
 晚は譲りませと

○ 第廿章回 天網快々疎而不漏

(銀)オイ眞學さんいくら驚いても何の益もたねへからやぶさか毒を喰はゞ皿までと
 云ふ事のわらアお千代坊のかわりよあの姉さんでなくさんどうだ(眞)はよ／＼どうも
 そう云だどおるの仕方おねへの姉さんもお千代坊はうつくら似類から懐しひじやねへ
 か(宇野)とさ銀道親分あうしたらどうだへどうせ強姦してやるなら自己等五人で面々聞
 引して番號順を爲うじやねへか(銀)ウムそ色の宜ろう(眞)イヤ自己の金主だから第一の
 後妻美預かるのが當然のまどた(骸骨吉)イヤおれがささゝ爲んだと争ひ合つて何日はつ
 へさやうも傍りません

憫れむべし一人は姿容優き美婦人で傍りまして他の五人の曲漢は鬼を欺くあら／＼れ男
 づれも色黒く眼体虚骨／＼一癖あるべき顔魂魄お加之見さへ凄々古寺なを普通たいて
 いの婦女なら肝魂魄の此身を離れてひたすら恐怖り外に詮術は傍りませんが一個の婦

人のと左めと恐怖のる様子もさく落附はらつて居まどのは奈何も履歴いありうな婦人と看へまど

五人の悪徒はもとよそ是非善悪を知ぬ奴也へ彼の婦人を争つて居るうちはや腕力も任せる様も成まして誰彼色の差別なく闘争を初めんとするありさま婦人はさつと思案致しまして仲裁も這入て(婦人)まろく皆人さんお待ちあさいまし野暮奥ひお前さんたちも悪黨は似合ないじやございませんか婦女の居い島じやあし穴はとあへ往てもございませわしらも相摸の筑井縣たてよ首領は土地の名物お前さんたちの様を醜男のまたどこの土地よあごまそものかその意気な所ど口前の宜所で婦人を口説て浮覽あさい婦女たちは婚つてとぐも應そそと廢さまもものそそをまア不開化な念佛講あんばとあろる古寺でもその療治は下さらないねへオヤお前さんたちはみんなお黙止でとねへそんなら序よ妾の素生を話し升からまめどつくことと耳の穴を堀つて聞てれ呉妾もよとはと問へ武家育ちかはる世間あかはる身の十六歳の春浮氣から男狂ひを爲初めてみの尾張なる所の静岡を跡よして流を渡りは富士川の水の源泉奈摩與美の甲斐の廓で苦界の勤め名は深雪でも朝顔の操節とあろる男子あ

は目の無妾の浮氣症思ふた人と意氣事の場合も吉野の澤渡屋でまつぱり濡て樂しむさいちと思ひのけ無邪間物も言ひは色の世間の義理づく遊妓と成てお坐敷へ招きた途内今夜の始末まづとつと妾のそせういあんちものでございませと云へ此方の五人はた驚いてたあひよ顔を見合せて居るばかり婦女の再ひ言様(それゆへ妾はしろうとらしくお前さんたちよ恐怖がつて泣わめさの致しませんのモンお前さんたちも妾の爲めひとり男と極りを附て可愛がつて下さいませまかしいくら狐上りの山猫でも食おのみわわたしのせいたくこのうち水際のたつたお壹人さんが妾やようござんとかから皆さんそのお心組で願ひ升五人の者はいまのお雪が言たおどと氣が注さ目配せ致してあひくお雪のお氣よ入り可愛あつて貰ふと思ひよわかぬ衣紋をつくろひ正坐るやら何やらお雪の可笑て堪へ切せず大笑ひを致しましたおまたも自分で酌を爲しひたたら五人の者を酔せて後よ逃る考案がのつたと看へまどはじめより諸君のお判断じでござりましたらうの銀造の涉千代と思つて引摺つたの銀造よ不幸でお千代よ取てはとく僥倖でござりませぬ萬一してお千代でありませとあ雪の如く艱難辛苦も致しませんから自然お雪の様お仕打よの参を兼てかならお強姦さきた

よの相違はござりません是とやら先んずきの人を制すると云とあるでお雪のはじめて五
のものをささよ香でかよりましたからよと容易五人の悪黨の自由よとるとい出来ず却つて
お雪の爲に殺做されて遂に其身の破滅よ及ぶのを知らせ寸善尺魔よ面白ううは騒いで居り
まそののまた是非もなるとでござります

警察署から派出された巡査や探索掛六七人の一連は足跡を追てかねがね目を着けて置まし
た観音寺村観音寺へ参り暫時伺候て看まよと果して五人のものの一人の婦女を相手よたい
そこの騒ぎを致して居まよとから合圖の聲と諸共よ戸を蹴破りて這入まして巡査御用だぞ
神妙よ爲る(五人)サア大變よ逃ろく(巡査探索)逃ると却つて罪の重いを是御用だ神妙よ
致せ(五人)へへく恐れ入やした尋常よ拘引て参りまよと決して逃だてり致しません(お雪)
どうも有難うござりませんと能くお出でなすつて下さいました(巡査)お前さんよ澤瀉屋のお雪
さんか(お雪)へへさようござりますませよお雪でござりませよ(巡査)今宵の直よ歸るの宜ひ
悪黨どもよ最難たから安心して宜ひ御用の存つたときよはまた喚から其時またお出で(お雪)
いゝどうも有難うござりました時よりましたときよから一同打連たちでお雪の無事よ澤瀉

屋悪黨は巡査どもよ警察へ引れました

さてお雪の歸りきて主人のおみね妹お千代は鐵道と眞學の事と説話しましたら皆大さよ驚る
ささよしてひたせられ千代の無難とれ雪の氣動で悪黨共の手よ侵さをせまた巡査よ連れられ行
かるよバ五人の悪黨も最早お千代は仇替せぬから三方目出鯛で大喜悦でござりませ

因みよヤ上まよ彼の五人の悪黨ども一應警察で取調べの上それ相當の處刑よ受まし
てよより後よあの者等よ就て一條のお話しのござりませよそれを茲處へ入ては先づ
小團圓とよべき眼目の話しの終局よせんからよれはいつれ第貳編よヤそでござりませ
せう

澤瀉屋のお雪お千代の姉妹は一日でも早く安田蘆水の方から音信のあらんよとを願つて居
ましたおもひは同じ甲州青柳宿の齋藤源左衛門の娘お遊は蘆水の歸宅の遅さを待たびて日
として思はぬ事はなく九月中旬よ愛知へ出立もはや其年の十二月の下旬までも木夫の方か
ら沙汰のムりませんから常よ心配の涙痕よ袖を濡して居ました
或る日の事同縣の初馬驛初馬學校の教師で新潟縣の士族倉橋光興のひさぐで訪問て参り

ましたよの人の源左衛門夫婦が以前からの懸念あるもの且安田とも朋友を致して居りませぬもので源左衛門もお遣も打集い種々の浮世雑談から蘆水の談話に移りました(光興)ときふ未だ安田君のお歸宅の何時か分辨し成まどか(源左)サア蘆水様の此九月藉のおどで愛知へ往ましたの未だ何處も居やら報知の傍りませぬから頼と分りませぬ(光)ツム只今の何處も居ませぬか知ませぬ先月のとで安田様のお説話が新聞へ出ました(源左)エ、新聞も出どのどんな事が出ました(光)言ふや及ばん安田君の不品行でも(源左)とうして何の新聞も出まじ(光)さようです確然甲府の新聞で開校の學校教員の不品行と題して別の一欄を設け毎日續き物で出升(運)エ、そりやまのどんだ事でも傍りませぬ升が其の不品行と云のはどんな不品行でもか(光)是はサア此九月お家から旅行してからの一條でも(源左)そりやまたとんなとで(光)安田さんの甲府増山町大榎樓の娼妓深雪は其前から親昵と重ね同山田町の若尾逸平と云る大尽と競争て金圓の爲は深雪はその大尽は身賤され若松町の妾宅も居て初めて安田様と出會し夫から深雪の大尽の手と離れて同伴は東京へ往心組て其翌晩吉野驛の澤瀉屋へ泊り込だ成なんでも其妾の妹とで安田様の極若いとき野合た者だそうで夫

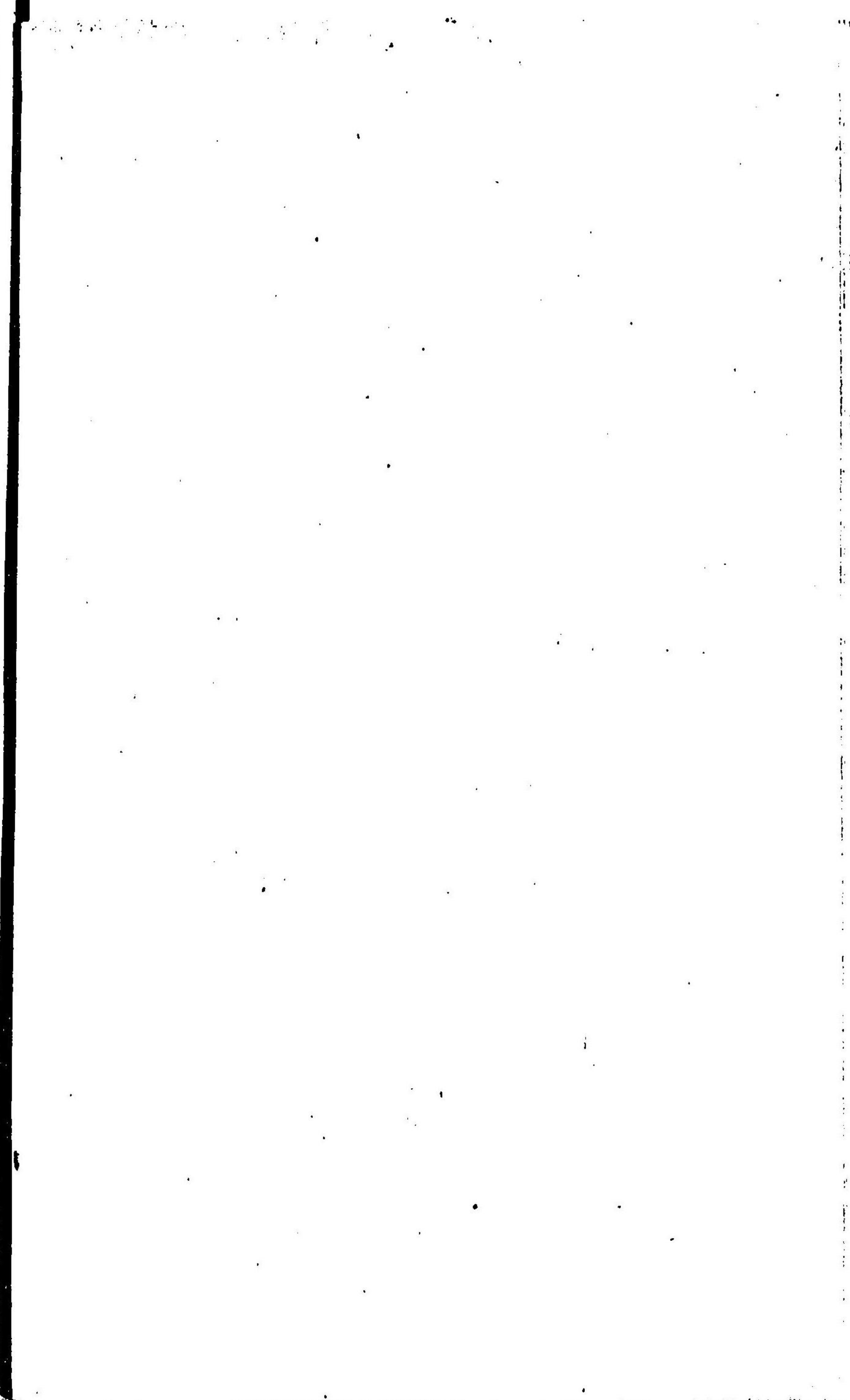
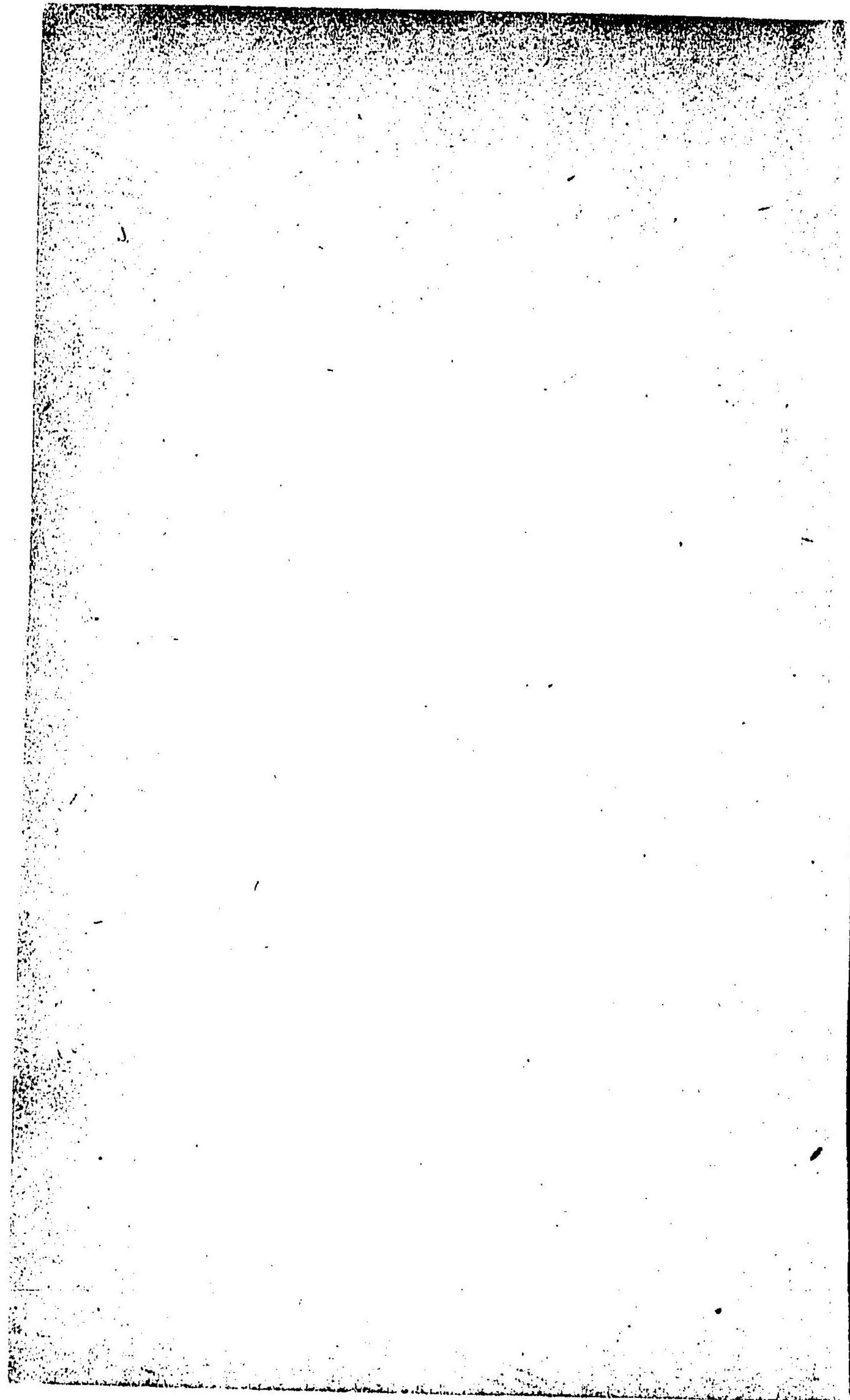
の大變の関着と成たの程なくとよの主人の仲裁でもとへ回復夫から兩婦人を運て東京へ往たと云ひ名古屋へ往たと云ひとあまでい出ましたの何れ致しても不品行極まる教員とや傍りませぬかねへ源左衛門さん如何です(源左)エ、まの實は聞けば呆を反つた男ではないかおきお遣やよく聞倉橋さんの言はしやつた事じやとても棄てのいけねへせ(光)兎も角その狼狽なる事の沙汰の限際てとらして那樣不品行も成りましたか僕も實は意想外の事な驚き入りました(運)ソリヤ倉橋さんの被仰るおとも最もとをきよ何か子細のわとそうとでござるま、ト暫時思案の躰なとしの「なよ思ひけんお遣は何時にも似合まを免下さいましと言ひ棄て」トト坐を立ち離障礙も荒々しく襖を開いて出て往きました源左衛門の頻りに思案投首心中餘程心配致して居る様子流石の悪心教師倉橋のいまさらあまり安田を悪口罵詈せしと後悔して手持無沙汰は暇を告げて歸宅ましたのがあれよりはたして如何なる事な爲りませぬか次回も應じませう

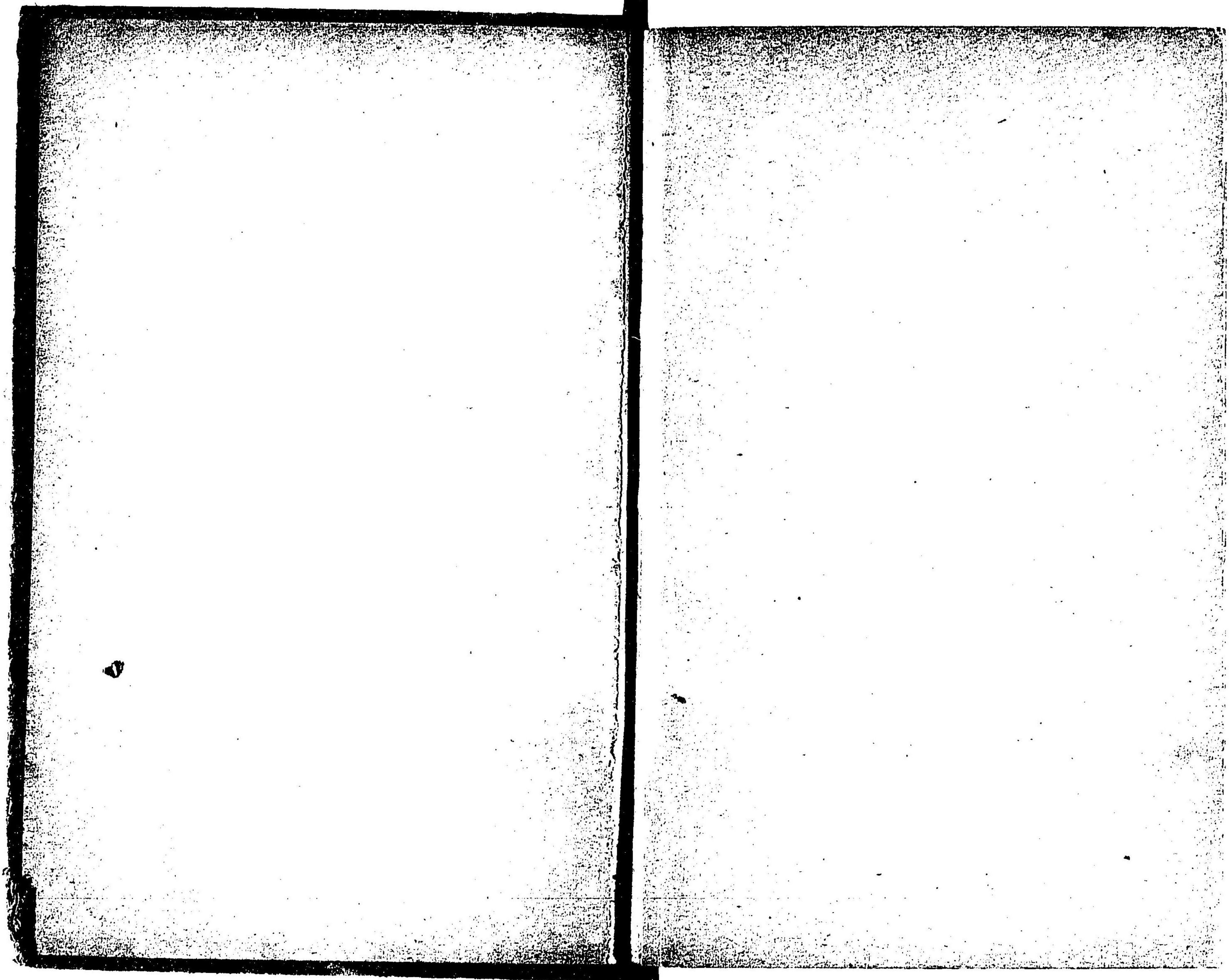
○第廿二回

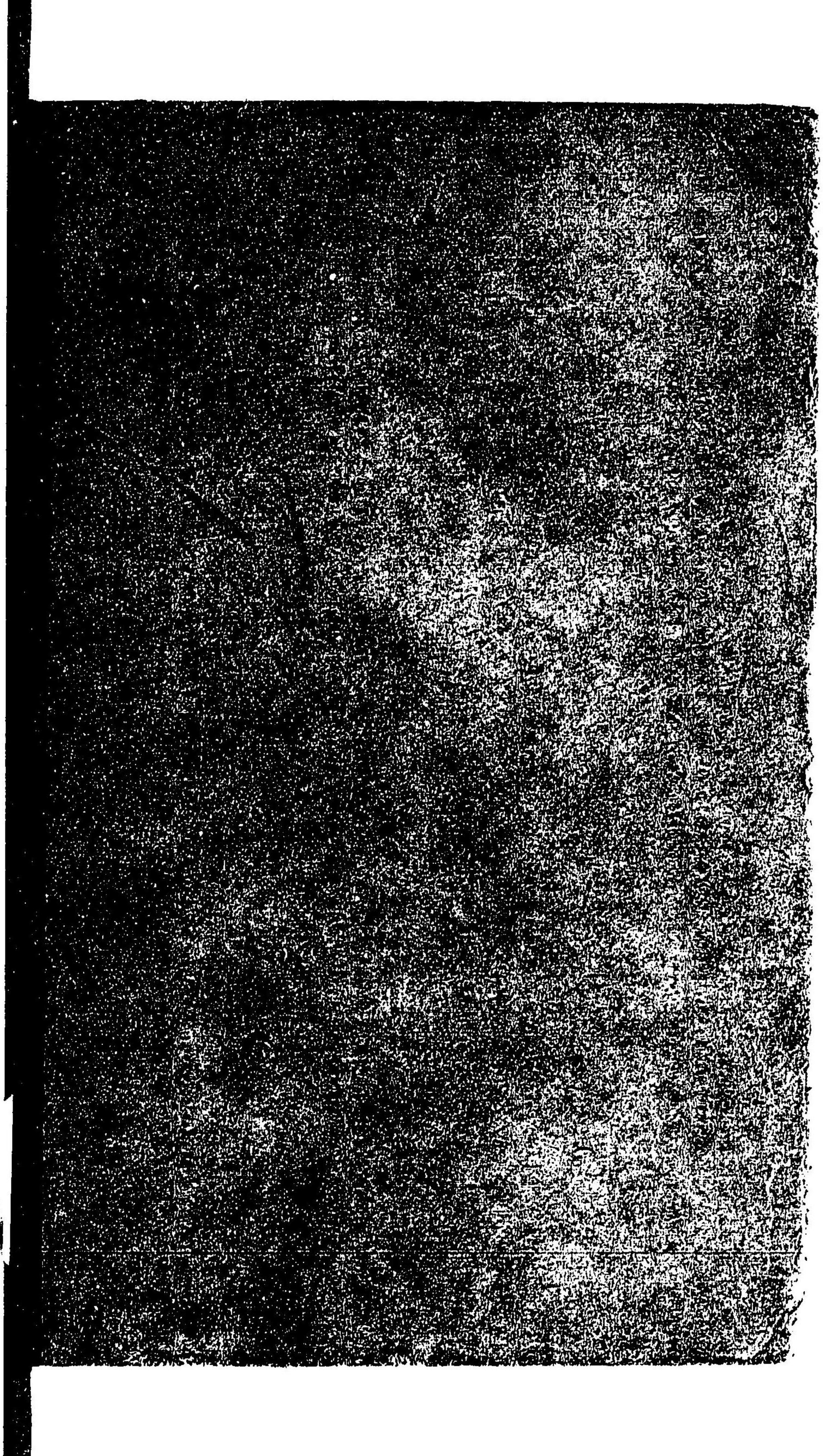
妖雲開而蘆水廻身邊定矣

(小圓圓)

茲處お南部屋の奥座敷いませし源左衛門夫婦の泣伏お遣も向ひ(源左)コレお遣そなたもさ



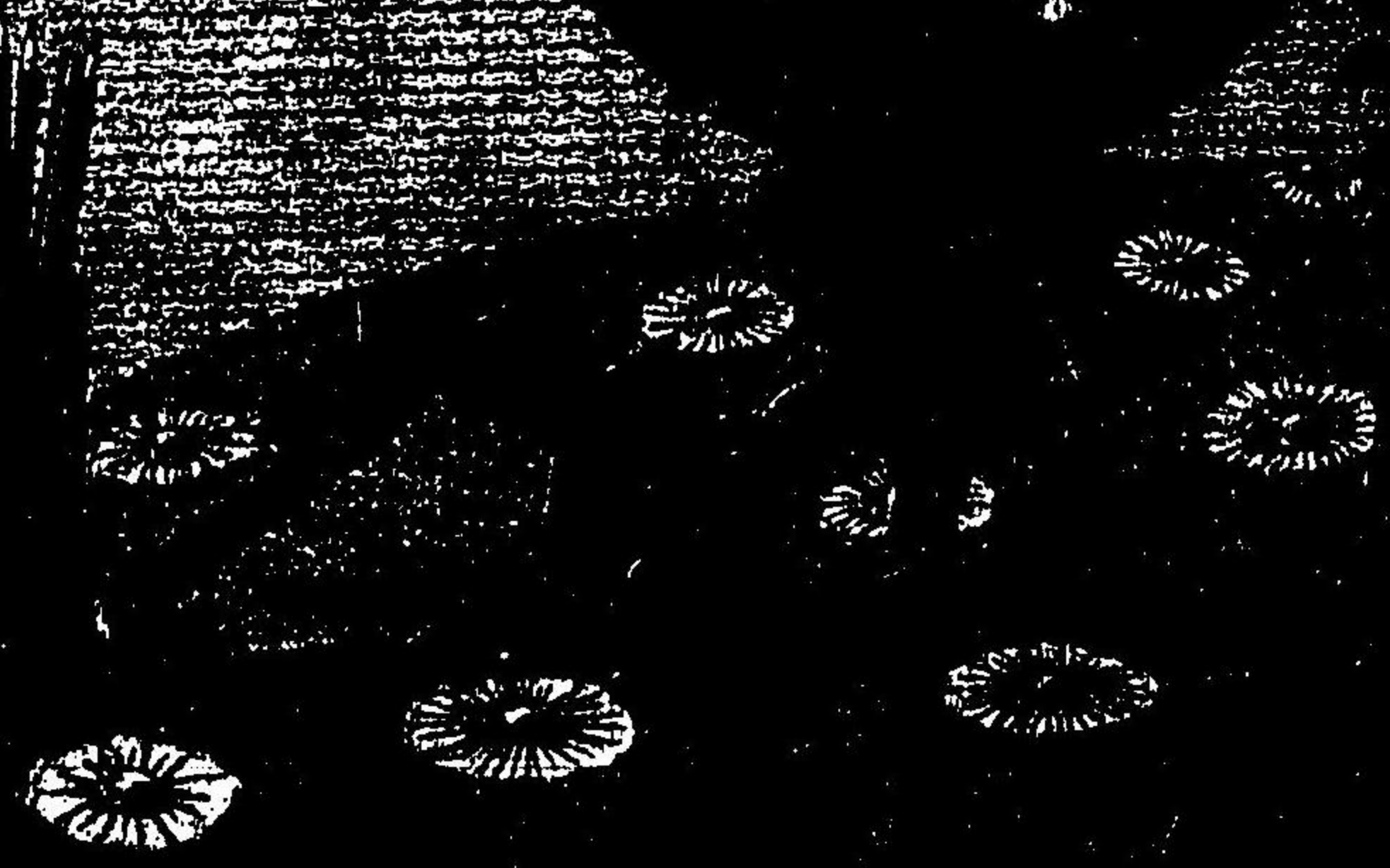




1979



情廻車火籠



097666-000-1

特10-719

廻転燈籠

松林 伯円/演述

M20

DBS-1599

